

## ぼくのお父さん

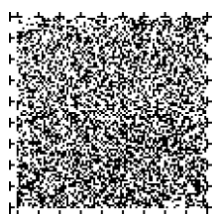
小 四

ぼくのお父さんは右目が見えませんが、それは、三才の時に友達がふり回したかさの先が目にはささってしまっただけです。

お父さんは、大きな病院で手じゅつを二回しました。おばあちゃんも、小学校入学前に目が見えるようになってほしいという思いで手じゅつを受けさせました。見えるようにはなりませんでしたが、そのころの写真を見せると、お父さんは目に大きなガ―ゼを当てていて、とてもいたそうでした。

おばあちゃんは、何でも自分でできるようにと、少しきびしいくらいの育て方をしたそうです。そして、右目の事でいやな思いをした時に、音楽がなぐさめになればと、ピアノを習わせたと言っていました。だから、お父さんは今でも音楽が好きです。

お父さんは、おじいちゃんの仕事がつごうで小学校を二回転校したそうです。ぼくと同じ四年生の時にはA県に住んでいました。その時に行ったB市への遠足では、伊達政宗の銅像の前で、友達にバスガイドさんのそばに連れて行かれ、「この子もかた目です。」とからかわれたそうです。とてもはずかしく、いやな思い



出だと話してくれました。

お父さんは、どの学校にも、見た目がちよつとちがうだけだからかってくる子がいたと言っていました。でも、やさしくしてくれる子の方が多かったので、からかわれてもあまり気にしなかつたようです。

ぼくは、五十メートル走で、「バタバタ走り」とからかわれたことがあります。走ることは自信があるので、とてもくやしい思いをしました。今でも少し気になります。そう考えるとお父さんは強いなと思います。

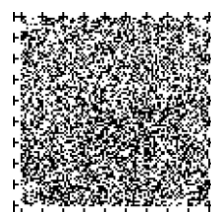
ぼくは、運動が好きで得意です。お父さんはぼくとちがって苦手です。でも、右目が見えていたら、運動が好きになつていたかもしれません。お父さ

んは、

「かた方の目だけでは、きょり間がよく分からないから走りにくい。」

と言っています。実さいにぼくも、かた方の目を閉じて歩いたり走ったりしてみましたが、真つすぐに進めませんでした。かた方の目だけで生活するのは大変だと思いました。

お父さんは、仕事の話をあまりしな  
いけれど、不自由な事がたくさんある  
と思います。それでも毎日がんばって  
働いてくれています。会社に行く時は、  
ぎがんに※をつけています。ぼくはあま  
り気にしていません。お父さんは  
自分の目が他の人にどう見られている  
のかが気になつているのだと思います。



少し前、野球のボールがぼくの目に  
当たったことがあります。お父さん  
はすごく心配して、すぐに病院へ連れ  
て行ってくれました。ふだんぼくの目  
が赤いだけでもすぐに心配します。  
きつと自分のような思いをさせたくな  
いと思っっているのかもしれない。  
ちよつと心配しすぎの時もあるけれど、  
ぼくのことを思ってくれてありがたい  
と思います。ぼくもお父さんのように、  
やさしい気持ちで周りの人に親切にし  
ていきたいです。

お父さんは、かた方の目が見えない  
ことを、だれかのせいにしたことは一  
度もなかったとおばあちゃんから聞き  
ました。そんなお父さんはとてもすご  
いと思います。ぼくもお父さんのよう

※ ぎがん（義眼）・・・人工の眼球

